日もいと長きに、つれづれなれば、夕暮れのいたう霞
（形容詞・体）（形容動詞・已）（形容詞・用）
みたるに紛れて、かの小柴垣（こしばがき）のもとに立ち出で給ふ。
（存続「たり」体）（Ⓢ作者→源氏）
人々は帰し給ひて、惟光朝臣とのぞき給へば、ただ
（Ⓢ作者→源氏）（Ⓢ作者→源氏）
この西面（にしおもて）にしも、持仏据ゑ奉りて行ふ尼なりけり。
（副助・強調）（Ⓚ作者→持仏）（断定「なり」用）（詠嘆「けり」終）
簾少し上げて、花奉るめり。中の柱に寄りゐて、
（Ⓚ作者→持仏）（推定「めり」終）（存続「たり」体）
脇息の上に経を置きて、いとなやましげに読みゐたる
（形容動詞・用）
尼君、ただ人と見えず。四十余ばかりにて、いと白う
（打消「ず」終）（断定「なり」用）（形容詞・用）
あてに、痩せたれど、つらつきふくらかに、まみのほ
（存続「たり」已）（形容動詞・用）
ど、髪のうつくしげにそがれたる末も、なかなか長き
（形容動詞・用）（完了「たり」体）（形容詞・体）
よりも、こよなう今めかしきものかなと、あはれに
（形容詞・用）（形容詞・体）（終助・詠嘆）（形容動詞・用）
見給ふ。清げなる大人二人ばかり、さては童べぞ、
（Ⓢ作者→源氏）（形容動詞・体）（係助）
出で入り遊ぶ。中に、十ばかりにやあらむと見えて、
（断定「なり」用）（推量「む」体）（係助）
白き衣、山吹などのなえたる着て、走り来たる女子、
（形容詞・体）（存続（完了）「たり」体）（完了「たり」体）
あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく
（完了「つ」体）（当然「べし」用）（打消「ず」用）（形容詞・用）
生ひ先見えて、うつくしげなるかたちなり。
（断定「なり」終）
髪は、扇を広げたるやうにゆらゆらとして、顔は、
（形容動詞・体）（完了「たり」体）
いと赤くすりなして立てり。「何事ぞや。童べと腹立ち
（形容詞・体）（完了「り」終）（係助「ぞ」＋係助「や」）（意疑問）
給へるか。」とて、尼君の見上げたるに、少しおぼえ
（完了「り」体）（完了「たり」体）
（Ⓢ尼君→若紫）（係助）（存続「たり」体）（断定「なり」体）（推定「めり」終）
たるところあれば、子なめりと見給ふ。
（Ⓢ作者→源氏）

日もたいそう長く、手持無沙汰なので、夕暮れのひどく霞みがかっているのに隠れて、あの小柴垣のそばに（源氏は）お出かけなさる。
人々は帰しなさって、惟光の朝臣と覗きなさったところ、
ちょうどこの西向きの部屋に、持仏を据え申し上げて勤行をしている尼であったよ。
簾を少し上げて、花をお供えしているようだ。中の柱に寄りかかって座り、
脇息の上にお経を置いて、たいへん辛そうに読経をしている
尼君は、普通の身分の人には見えない。四十歳ほどで、たいへん色白で
上品で、痩せているけれど、顔つきはふっくらとしていて、
目元のあたり、髪が綺麗に切り揃えられた先も、
かえって長いよりも、格別に当世風だなあと、しみじみとご覧になる。さっぱりとして綺麗な年配の女房が二人ほど、それに童女たちが
出入りして遊んでいる。その中に十歳ほどであろうかと見えて、
白い下着に山吹がさねの着慣れた上着を着て、走ってきた女の子は、
たくさん見えた子供たちには比べ物にならない、
成人後の美しい姿がはっきりと分かる、可愛らしい容貌である。
髪は、扇を広げたようにゆらゆらとして、顔は
（泣いて擦ったため）たいそう赤くして立っている。
「何事ですか。子供と喧嘩をしなさったのですか？」
と言って、尼君が見上げると、少し似ているところがあるので、子供であるようだとご覧になる。